動画による看護技術の課題提出の効果

キーワード:動画、課題提出、タブレット端末、Moodle、自己評価

菅原真優美¹⁾、罇淳子¹⁾、○瀬倉幸子¹⁾、小山聡子¹⁾、三上恭史¹⁾ 新潟青陵大学¹⁾

I 目的

これまで看護技術における手技の習得や達成度は、 実技試験で評価されてきた。しかし、演習日から実技 試験まで時間があるため、自己練習では正しい技術を 忘れたり、勘違いしたまま練習が繰り返される可能性 がある。その解決手段として、自己練習中の手技をタ ブレット端末で動画撮影し、教員へ提出することで技 術の習得状況の確認が可能になるのではないかと考 えた。本研究は動画による課題提出の効果とその可能 性を明らかにする。

Ⅱ 方法

1. **対象**: Q 大学看護学科 2 年生。2. 研究期間: 平成 26 年6月~7月。3.調査方法:注射準備(指示伝票と薬 液の確認、注射器と注射針の接続、アンプルから薬液 を吸引し注射器に詰める動作)の一連の手技で動画に よる課題提出を実施した。①動画提出サイトの構築: 学内のサーバーに Moodle 経由で学生が課題を提出す るためのサイトを作成した。②課題の提出:学生は動 画提出サイトにて教員による模範ビデオを閲覧後、模 範ビデオと同じ手技を実習室に常置したタブレット 端末(4台)で撮影後、Moodle 経由で提出 (1 回目提 出)。同時に、自分の動画の自己評価(14 項目)を 送信した。③課題の評価:教員は提出された動画を学 生と同じ評価表を用いて採点し、コメントと一緒に返 信した。学生は教員評価を Moodle で確認後、技術を 修正し、再度課題提出(2回目提出)。4.分析:1回 目と2回目の自己評価・教員評価の一致率の比較と課 題提出に伴う技術上の問題点を抽出した。5. 倫理的配 慮:以下を口頭と文面で研究対象者に説明した。①本 研究は単位認定や成績評価とは関係しない。②参加は 自由意思であり、途中辞退が可能。途中辞退、参加お よび不参加による不利益は生じない。③参加に伴い、 自分の技術を動画撮影するための時間が必要。④研究 結果の公表時のデータの匿名性。

Ⅲ 結果

1. 課題提出状況: 研究参加に同意の得られた学生は 14 人で、1 回でも動画で課題を提出した学生は 12 人、1 回目と 2 回目の課題をもれなく提出した学生は 5 人だった。課題の提出方法に関する問い合わせはなかったが、動画のアップロードに時間がかかるという意見があった。2. 学生評価と教員評価の比較: 注射準備の過程で 14 の評価項目について「全体に改善が必要」0点、「一部に改善が必要」1点、「良い」2点の3段

階で自己評価および教員評価を行った。その結果、1 回目の提出では学生の自己評価は教員評価よりも高 い傾向にあり、2回目の提出では学生と教員の評価の 一致率が高くなった。

表1 教員評価と学生評価の差

-	教員評価と	1 回目		2 [2 回目	
	学生評価の差	評価数	%	評価数	%	
	-2	4	2.7%	0	0.0%	
	-1	26	17.8%	3	3.9%	
	0	84	57.5%	60	78.9%	
	1	25	17.1%	12	15.8%	
	2	7	4.8%	1	1.3%	
	合計	146	100%	76	100%	

14 の評価項目中 13 項目は、1 回目より 2 回目の評価の一致率が高くなった。最も改善した項目は「薬液量を調節するとき、針先をゴミ袋に近づけない」で 1 回目の一致率が 40%、2 回目は 100%だった。「注射器と注射針を無菌的に接続する」の 1 項目のみ、72.7%から 50%へと一致率が下がった。

Ⅳ 考察

看護技術は、繰り返し実践しながら徐々に習得され ていくものでありながら、授業時間は限られており、 技術習得のために学生は自己練習を行う必要がある。 その過程において演習で行った手技を忘れたり、誤っ ているにもかかわらず学生自身が「できている」と勘 違いする可能性がある。今回、動画で課題提出するこ とで出来ている項目、改善を要する項目を学生と教員 の双方で共有できた。また、1回目よりも2回目の評 価の方が双方の評価の一致率が高くなったことから、 教員の評価やコメントにより意識されていなかった 注意点が明らかになったといえる。一致率が低くなっ た注射器と注射針の接続は、無菌操作で注意を要する 技術である。教員のコメントによって学生は客観的に 自己評価するようになったと考える。動画による課題 提出はスマートフォンを使い慣れている学生にとっ て困難なものでなく、教員側が動画提出サイトを構築 できれば技術的には可能である。

V 結論

動画による看護技術の課題提出は、学生と教員で出来ている項目、改善を要する技術項目を共有し、技術向上に役立てることができる。また、自己の技術に対して客観的な評価ができるようになることを期待できる。教員側が動画提出サイトを構築すれば、学生がタブレット端末を使用して動画撮影し、課題提出することは可能である。